

## 1、派遣国の概容

### (1) はじめに

- ・ 軍人上がりの 8 人なら大丈夫だろうと思っていたら同じような体格の 20 人に襲われた。
- ・ 腕時計をした旅行者が襲撃され、目が覚めたら手首が切り落とされていた。
- ・ 車で旅行者に突っ込んで倒れた、というか轢いた後から荷物とかを強奪する。
- ・ タクシーからショッピングセンターまでの 10m の間に強盗に襲われた。
- ・ バスに乗れば安全だろうと思ったら、バスの乗客が全員強盗だった。
- ・ 「そんな危険なわけがない」といって出て行った旅行者が 5 分後血まみれで戻ってきた
- ・ 「何も持たなければ襲われるわけがない」と手ぶらで出て行った旅行者が靴と服を盗まれ下着で戻ってきた。
- ・ 最近流行っている犯罪は「石強盗。石を手に持って旅行者に殴りかかるから。
- ・ 中心駅から半径 200m は強盗にあう確率が 150%。一度襲われてまた襲われる確率が 50% の意味。
- ・ ヨハネスブルグにおける殺人事件による死亡者は 1 日平均 120 人、うち約 20 人が外国人旅行者。

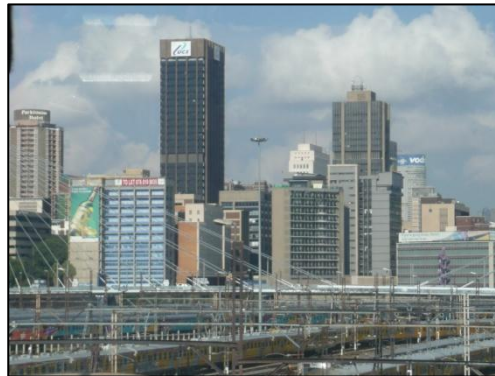
これは私が初めて赴任地を知らされた直後、インターネットで「南アフリカ ヨハネスブルグ」と検索した際に出てきた『情報』である。「世界の犯罪首都」「1 日 50 人が殺される町」「犯罪発生率世界最高」など、どれも悲惨なものばかりだった。当時 2 人の子どもと妻を帯同して赴任することに真剣に悩んだものだ。

しかし実際に赴任してみると、南アフリカは“アフリカ”という名前から思い起こすイメージからはかけ離れた近代的なインフラの整う大都市が点在しながら、その周辺では心の温かな人々がお互いを尊重しながら生きていこうとする雰囲気を感じられる素晴らしい国だった。各種情報伝達手段が発達し、あたかも世界と日本は同じものを見て同じように感じられる国になったと思ひ込みがちだが、実際には 13,000 km の距離



が変わるわけではない。実は、後述する南アフリカでの心を揺さぶられる数々の出会いは、無知や偏見、思い込みや決めつけに惑わされることなく自分自身の五感と心でとらえることこそが大切なのだという実感を私に教えてくれるかけがえのない体験となった。

オランダやイギリスから入ってきた白人中心の欧米的な価値観と物質文明、アフリカの大地で太古から自然とともにゆったりと暮らしてきた黒人の精神性。対立しながらも一つの国として生きてゆくためにはお互いが必要



なのだという微妙な関係が、『人類への犯罪』といわれたアパルトヘイトを作り出しもし、それを話し合いによって乗り越えることで世界にとっての『未来を照らす希望の光』ともなった。

世界で唯一、支配者と被支配者の立場が入れ替わる大きな革命を武力や政治の論理ではなく、『赦す』という大いなる人間性によって成し遂げることができた国。休日に車でライオンや象やクジラを見に行けるだけではない、金やダイヤモンドで潤うだけではない、ましてや強盗や殺人が日常的に起こる犯罪国家などでは決してない、この素晴らしい国の本当の姿について少しでも知っていただくことができればいいと願っている。

## (2) 国内の様子

南アフリカはアフリカの最南端に位置する国であるが、気候は年間を通じて大変過ごしやすい。空気が乾燥しているため、盛夏で気温が高くても日陰に入れば肌寒く感じるほどである。特に日本人学校があるヨハネスブルグは標高 1500m 以上の高地にあるため、冬は霜がおり雪がちらつくことさえある。

アフリカ諸国の中でもぬきんでて近代化が進んだ国であり、他国からの出稼ぎ労働が多い。特にビザを持たない不法入国者が都市部の空きビルやタウンシップ(アパルトヘイト時代の黒人居住区)に流入し、そこから治安の悪化が進んでいるといわれる。



北にはクルーガー国立公園やカラハリ・トランスフロンティア国立公園が広がり、サバンナや砂漠を自家用車で回りながらライオンや象、キリンなどの野生動物を間近に見ることができる。大西洋岸ではクジラやホオジロザメを見ることができし、インド洋岸では真冬でも海水浴やサーフィンができる。

ヨーロッパの植民地であったため宿泊施設やサービスなどのファシリティは大変質が高い。都市部での物価が日本並みであることは難点だが、豊富な物流によってほぼ日本と同様の商品が手に入り(マグロの刺身や納豆まで!)、昼間サファリでライオンを見て、夜はロッジでワインとフランス料理のディナーを楽しめてしまう国である。

国内の隅々まで舗装道路が張り巡らされ、主要な都市を高速道路が結び 24 時間営業のガソリンスタンドとサービスエリアが整備されている。たぶん、ほとんどの人々が想像する『アフリカ』とは大きく異なる様子であろうと思う。正直、私自身も赴任地が決まって本格的な情報収集を始めるまでは、空港から一歩出るとサバンナが広がり象やキリン、槍を持った半裸の黒人が歩き回っているのだらうと真剣に思っていた。アジアやヨーロッパへの海外旅行経験は人並み以上にあつたのに、である。



しかしよく目をこらして周囲を見回せるようになると、その快適さは多くの黒人たちを低賃金で雇うことにより支えられていると気がつく。アパルトヘイトは英語で「パートシステム」という。白人と黒人は生活圏が物理的にはっきり分けられ、白人が黒人の悲惨な生活を見ることなく暮らせるようになっていたのだ。良心的な白人にとっても後ろめたさを感じることなく黒人の労働力だけを掬い取ることが

できた仕組みだった。お互いの接点を最小にすることで、分かり合うチャンスを奪い、人間同士の心の交流から生まれる親近感を持たずに暮らす仕組みができていた。お互いを得体の知れないものとしてただ恐れていたのだ。



ネルソン・マンデラは獄中で白人の言葉を学び看守と交流する過程で“彼らも自分と同じ人間なのだ”と実感した。その体験から“知らないから恐れるのだ。知ろうとしないから分かり合えないのだ。”と訴えて新しい国作りを進めた。

少しだけの勇気をもって暮らしてみるとほとんどの場面で店員やガーデナーやドライバーとして接する人々が黒人であり、その人たちに関心を持てば彼らの生活ぶりが見え始める。彼らの生活圏に足を踏み込めば、危険とか不潔とか貧困といったネガティブな情報の真相だけでなく、この国を内戦に陥らせることなく今の繁栄を作り上げた黒人の心の広さとか人間愛の深さとかに気づくことができるのだ。そしてそのことが私を黒人居住区に足を踏み入れさせ、さらにそこでの体験を教材化して日本人学校の児童生徒に現地理解の学習素材として引き合わせようとするきっかけともなった。その経過については後述する。

## 2、ヨハネスブルグ日本人学校

### (1) 日本人学校の概要

ヨハネスブルグ日本人学校は創立が1966年（昭和41年）と、在外教育施設の中でも長い歴史を持っている。翌年1967年（昭和42年）に全日制の日本人学校として正式に認められた。そして1975年（昭和50年）日本国における小中学校の教育課程と同等の過程を有する『在外教育施設』としての認定を受けた。2006年には開校40周年を迎えた。

運営の主体は南アフリカ日本人会にあり、南アフリカの私立学校として登録されている。施設の所有権も日本人会にあり日本人会会長と在南ア日本国大使を顧問とした『日本人学校運営委員会』が学校経営に携わる。日本人会教育幹事を兼務する運営委員長含め他の委員も保護者の中から任せられる。毎月一回の運営委員会では、校長・教務主任・運営委員が集まり、現地スタッフの雇用から施設設備の修繕、予算の執行などについて細かく検討する。赴任3年目、教務主任であった私も参加していたが、日本ではトップクラスの商社マンである運営委員の方々の仕事の進め方はおおよそ教育現場のそれとは大きく異なり、コスト計算や意思決定プロセスなどの面で大変勉強になった。また教員の仕事に対する理解を広める場としても貴重であり、日本国内ではなかなかできない異業種交流を通じ見識を広げることができた。

南アフリカ国内における私立学校と同等の扱いを受けている関係で、当地の法律による運営面での規制もある。祝祭日は南アフリカのカレンダーに沿ってとられ、年間の授業日数が200日を超えないよ



うにしなければならないなど、年間の教育計画を立てる上で配慮することも多かった。

ヨハネスブルグ日本人学校はヨハネスブルグ市内、ヨハネスブルグ市営の植物園やダム湖に囲まれた住宅街の一角にある。最近ナイジェリアなどの海外から流入する不法移民が占拠して治安悪化の象徴ともなっている市の中心部（通称・タウン）からは意外に近いが、セキュリティー会社との契約によって派遣されているガードマンと周囲に張り巡らされたエレクトリックフェンスによって24時間の警備がされ、児童の送迎は保護者の乗用車かスクールバスである。

## （2）児童生徒、教職員

赴任最終年度であった平成23年度末の児童生徒数及び教職員数は下記の通り。

○小学部…30名、中学部…1名

- ・各学年とも学級数は1であったが、英語圏であるため現地校に入学させやすいこと、企業が赴任者を若い社員にシフトしてきたことなどで児童数減少が見られる。ここ3年は年間の平均在籍人数が30人を切っており、私たち3名の教員が帰国したあとに来た平成24年度新赴任教員は1名になってしまい、複式化を余儀なくされている。

＊文部科学省派遣教員：7名

＊現地採用職員：英会話講師2名、秘書1名、事務員1名、学校採用ガードマン1名、ガーデナー2名、派遣ガードマン6名、ドライバー4名



## （3）ヨハネスブルグ日本人学校の教育

### 《朝の活動》

- ・8時から15分間朝の活動があり、曜日によって全校朝会、清掃活動、全校英会話、全校読書などの活動が組まれる。全校英会話は日本人教師全員が交代で指導案を考え実施するもので、遠足で使う単語や交流学习で歌う英語の歌の練習などをゲーム形式のアクティビティーで楽しむことが多い。帰国後に外国語活動の中心となる可能性が高い派遣教員にとって、よい研修機会ともなっている。

### 《授業》

- ・小学部・中学部とも45分授業になっている。中学部については5分の不足分は時数を0.9倍で計算し、総計で指導要領基準を下回らないようにすることで対応している。
- ・本校では総合学習の時間を現地理解のための英会話授業として実施しており、複数学年の習熟度クラス編成による20分間の「EC英会話」、さらに学級単位で実施する45分の「英会話」が小学部4年生まで週1時間、小学部5年生以上は週2時間組み込まれている。現地採用の英会話講師を2名配置し、基本的にオールイングリッシュによる授業となっている。総合学習が実質的に英語授業となっていることで現地理解教育の時間を確保することが難しい側面はあるものの、英語力の向上は保護者から強い要請もあり、在外教育施設としての『特色ある教育』の一つでもある。実際にまったく日本で英語に触れたことのない児童でも、在学3年で英検準2級程度を取得している。

## 《その他》

・昼食は教員も含め全員弁当持参である。市内では中華食材店や韓国食材店に日本の食材が置いてあり、ほとんどの児童は日本国内で食べる弁当と遜色ないものを持参する。天気の良い日、全校児童生徒と教職員で芝生のグラウンドで弁当を食べながら談笑したことはとてもよい思い出となった。



## (4) 安全確保

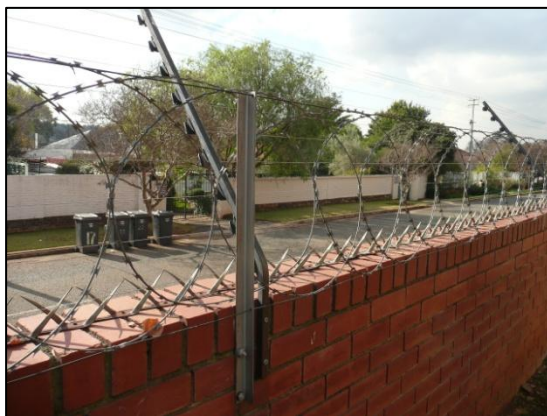
冒頭で紹介したとおり、南アフリカは近年治安の悪化が著しいといわれている。特にアパルトヘイト政権下では人権無視にも近い形で貧困層である黒人を力で抑えていたために、表向きの治安は保たれていた。アパルトヘイト終了とともに居住地区の区別がなくなり物理的に富裕な白人と貧困な黒人の生活圏が重なるようになり、さらにアフリカでもっとも経済的に恵まれたこの国にアフリカ各国から出稼ぎ労働に来る外国人（多くは不法入国）が増えたため、それを手引きしたり居住場所をあっせんしたりするシンジゲートがはびこり、職の見つからない若者をギャング化させた。

2010年のサッカーワールドカップ開催に向けて治安回復に力を入れたことやBEE政策で黒人にもある程度の所得がまわるようになったことなどもあって、一時よりも治安が回復してはいるものの、依然路上強盗や住居侵入窃盗も多い。特に日本人ビジネスマンは大企業の社員であり高級住宅街に住んで高級外車に乗るなど狙われやすい状況にある。大部分がその子女である日本人学校では安全確保に日本では考えられないほどの神経を使っている。

## 《ハード面》

学校の周囲は高圧電流を流したエレクトリックフェンスが張り巡らされ、校舎内も外部との出入り口にはバーグラバーと呼ばれる鉄格子の扉が設置される。不審者が侵入した際はこれを閉めて籠城する形をとることになっている。

校内には警備会社直通の警報装置が設置してあり、手順に従って開錠しないと発報する。ちなみに日本人学校は建物自体が古く、各教室や通路の鍵がそれぞれ壊れるたびに更新されてきたために各所をあけるためにそれぞれの鍵が必要である。新赴任のころは20本以上もある鍵束から必要な鍵を見つけるのに大変苦労した。誤って警報を発報してしまい、警備会社から自動小銃を持った警備員が駆けつけてきてあわてたこともあった。



## 《ソフト面》

### ◎警備の体制

警備員は学校採用の1名をチーフとして、契約警備会社からの派遣ガードマンが日中6名、夜間2名（3名のうち2名で当直、うち1名は拳銃を所持）いる。派遣ガードマンのうち3名は3台のスクールバスに添乗し、登下校の警護に当たる。

## ◎避難訓練

《バスジャック対応、外部侵入者対応、暴動対応》



このうち毎年4月の早い段階でスクールバス利用のマナー指導と合わせて、バスジャック対応の訓練を実施している。大部分の児童生徒はスクールバスを利用し登下校を行っている。送迎範囲が市内全域にわたるため、片道1時間近く乗車する児童もいる。さらに校外学習や遠足など学校行事においても利用することが多い。南アフリカでは南米などと違って誘拐して身代金を要求して、という複雑な犯罪は少ない。むしろ走行中や信号停止中の車に銃を突

きつけ金品や車両を盗む手口が多い。『スマッシュ&クラブ』といって、停車中の車の窓をたたき割って手を差し入れて助手席においてある貴重品をつかんで逃げる、という犯罪も多く、私たち教員間でも新赴任時に車購入と同時に防犯用のフィルムを貼ることを義務付けているほどだ。

その意味では金品を持っていない子どもが乗るスクールバス自体は狙われる確率は低いのだが、例えば『Lie down! (ふせろ)』『Be quiet! (静かに)』『Get off! (降りろ)』などの英語を聞き分けられなければ命の危険がある。その意味でも転入生が入ったばかりの早い時期での実施となっている。近年は大使館の警備対策官に来ていただき講評と指導をいただくので、学校の安全対策教員との情報交換の機会ともなっている。

このほか外部から不審者が侵入した場合と学校周辺で暴動が起きた場合についての避難訓練も行っている。

## 3. 現地理解・素材発掘と実践

### (1) 現地の人々との交流

どこの在外教育施設も同じだと思うが、本校でも現地理解教育の推進をどう図るかが研究課題となる。南アフリカは前述の通り治安に問題があることから積極的に現地の人々に触れ合う活動を設定できず、どうしても安全な白人社会とのかかわりの範囲内でしか活動できない面があった。この国の歴史を踏まえれば、国民の大部分を占める黒人との交流なしに本当の『南アフリカ』は学べないはず、と考えていた私は、とりあえず身近なところから黒人との交流を始めることにした。

赴任初年(2009年)度に学校行事の一つである芸術鑑賞会の担当となり、SOWETOの教会聖歌隊を日本人学校に招こうと考えたことから始まった現地の黒人との交流活動が、3年間の任期中にその輪を広げてやがて日本人学校の児童とSOWETOの孤児たちとの心の交流活動につながっていった過程を紹介したい。合わせて当時の児童の作文を掲載するが、これを読むと現地理解教育が子どもたちの心の成長にいかに大きな役割を果たしたかを知ってもらえるのではないと思う。

なお、本報告は赴任当時に日本国内在籍校向けに書いた現地報告通信用文章も流用する。執筆当時の文章のため時系列表記が多少ずれている点があることをご了承願いたい。

## 交流の入り口は芸術鑑賞会

1学期に国歌合唱の取り組みを通じて、南アフリカという国に対する親しみを持てるようになった児童生徒ですが、実際には犯罪率世界一といわれるヨハネスブルグで生活するために、現地の人々との接触を極力避けているのが実情です。

学校では年回5回もの避難訓練を行います。火災対応が1回あるもののその他は全て暴動対応や不審者侵入対応、バスジャック対応というものです。街中で地元の人々と自然に交流する機会は全くと言ってよいほどありません。そのような状況では、現地理解の本当の意味での深まりは期待できないという印象を持っていました。



そこで、担当者である私に内容が一任されていた芸術鑑賞会を活用して、なんとか現地の人々との交流を図る方法はないかと考えました。たまたま、本校で働く現地黒人スタッフの一人が、SOWETO地区でチャーチ・クワイア(教会の聖歌隊)に所属して活動していることを知ったのです。そこで、彼らを学校に招いて、児童生徒にアフリカに古くから住む人々の生の歌声を聞かせる企画を立てることにしました。

本校スタッフを通じて連絡を取ったところ、来校公演を快諾してもらうことができましたが、鑑賞指導する立場である私自身にアフリカのチャーチ・クワイアに関する知識が全くありません。彼らの歌声がどのようなものか、果たして教育的効果が期待できるものなのかが判然としません。そこで、件のスタッフに頼んで彼らが活動するSOWETOの教会まで出かけ、実際に彼らの活動の様子や歌声を聞かせてもらうことにしました。

SOWETO地区はアパルトヘイト時代から黒人居住区とされており、未だにシャック小屋と呼ばれるバラックが立ち並んでいる場所です。基本的に外国人が単独で入りこむには治安上問題があるとされ、在留邦人はほとんど出入りをしていませんでした。

今回招聘するチャーチ・クワイアの活動拠点であるSt. Phillips教会へは、紹介してくれた本校スクールバス・ドライバーのアウグスティナス・メカ氏の案内で出かけました。そこで聞かせていただいた歌は本当に素晴らしいもので、伴奏もなく指揮者もいない中で次々と自然発生のよう合唱が始まる様子や、歌う際の彼らの生き生きとした表情、体全体を使って表現しようとする姿には、日本の子どもたちが学ぶべき点が非常に多いと感じられました。芸術鑑賞行事として実施する意義は非常に高いと確認することができたのです。同行した家族も鳥肌が立つほど感動したといえます。

芸術鑑賞会当日、迎えに行かせたスクールバスに乗った彼らの到着が計画時間よりも遅れて多少心配しましたが、この国の国民性を勘案して30分ほどのマージンを取って計画を立ててあったため行事開始には支障ありませんでした。このあたりは現地の方との交流を計画する際に立案者が勘案しておかなければならない点で、その後生きる経験となりました。





鑑賞会当日は保護者にも参観を呼び掛けており、多数が参加してくれました。自由な雰囲気が始まった公演は、最初から迫力のある歌声で児童を一気に引きつけます。クワイアのメンバーの方が途中から児童生徒席に来て小学生を舞台に連れ出し、一緒に歌うように仕向けてくれたのをきっかけに、次第に児童生徒が自発的に舞台に出て一緒に歌ったり踊ったりするようになりましたが、私自身そのようなところまでお互いの距離が縮まってくれたら、という漠然とした思いは持っていたもののそれが実現できるとは考えていなかったもので、大変感動しました。特に、アンコールとして保護者からのリクエストに応じて南アフリカ国歌を歌ってくれることになった際、国歌指導の実践活動が生きて全校児童生徒が4種類の言語とメロディーで現地の人々と一緒に歌うことができたことは、人との触れ合いを中心とした現地理解の実践としての意義以上に私自身が心からの感動を味わうことができたという点でも大変充実したものとなりました。

～現地報告通信より転載～

## 思い切って現地の人の中に飛び込みました。その1

ヨハネスブルグ日本人学校では、4月から小1～3年、小4～6年、中学部の3ユニットごとに現地理解をテーマに調べ学習を進め、学習発表会で様々な形で発表しました。その過程で、私は自分が担当する部分でなるべく現地の人々と直接子どもたちが交流できる方法を考えて、実行してみることにしました。

まずは9月の芸術発表会。実施内容も期日も担当者に一任されていたこの行事、たまたま一緒に働く現地人ドライバーの一人が元黒人居住区のSOWETOという地区の教会で聖歌を歌うチャーチ・クワイアのメンバーだと知り、その方々を学校に招いてコンサートを開いてもらおうと考えたのでした。

SOWETOは治安も悪く、日本人が個人で出入りできる場所ではないと聞いていましたが、そのドライバーさんに先導してもらってSOWETOの教会(St. Phillips Church)を訪ねて日曜日の礼拝に参加し実際に彼らの素晴らしい歌声に触れました。彼らも直接自分たちの活動場所まで来た私を大歓迎してくれ、来校を快諾してくれたのです。



芸術鑑賞会終了後の週末、改めてお礼を伝えるために同僚を誘って教会を再訪しました。小学部の卒業担任ではありましたが、赴任1年目ということで校務分掌の負担を軽くしてもらっていたので、休日を使って何度も通うことができました。

このときのつながりが、その後3年間の現地理解教育の土台となりました。彼らの言葉をおぼえて話しかけたのがよかったみたい。





芸術鑑賞会はすべて一人で企画したので度重なる交渉などは大変でしたが、当日の子どもたちとクワイアのメンバーの方々との交流はそんな苦勞を吹き飛ばす素晴らしいものでした。アフリカの伝統的な歌を10曲ほど歌っていただきましたが、全て伴奏なしのアカペラで、ハーモニーの力強さはもちろん、歌う時の彼らの表情の感動的だったこと！歌は心を伝えると、体全体で教えてくれたのです。



最初はおとなしく聞いていた日本の子どもたちでしたが、自然と一緒に歌って踊り出しました。現地の民族語の歌詞ばかりで意味はわからないはずなのに、思春期真っ只中の中学生、さらに保護者、教員までが引き込まれていきました。最後、アンコールで歌ってくれた南アフリカの国歌を音楽の授業で学んでいた日本の子どもたちが一緒に歌いあげた瞬間は“涙が出た”とあるお母さんがおっしゃっていました。



## 思い切って現地の人の中に飛び込みました。その2

学習発表会に向けた現地理解教育の、私のもう一つのチャレンジは、一緒に学校で働く現地スタッフ(ガードマン、バスのドライバー、校地管理のガーデナー、校内清掃のクリーナー)たちに当日の発表に参加してもらおうというものでした。

多くの在外教育施設では現地の人を雇っていますが、教師ではない彼らは子どもたちから見るとただの雇い人でしかありません。特にこの国では“白人は雇い主、黒人は下働き”というアパルトヘイト時代の意識が根強く残っており、白人側で生活する日本人にも少なからずそんな感覚が移ってしまっているように思います。

私は将来海外で働く可能性の高い日本人学校の子どもたちに、もともとアフリカに住み独自の文化を育ててきた黒人の方たちをもっと尊敬してもらいたいと感じていました。

そこで、学習発表会の中に現地スタッフが活躍する場面、子どもと一緒に何かをする場面を取り入れたいと考えました。具体的には、音楽の授業を担当しているのでまずはエンディングの全校合唱に彼らを引き入れることにしました。たまたま去年はマイケル・ジャクソンが亡くなったということもあり、曲目は『We are the world』に決定。この曲はもともとアフリカの子どもたちを飢餓から救おうと、世界中のアーティストが集まって作った曲です。



10月、初めて子どもたちとスタッフ、先生と一緒に歌声を合わせました。“違う国のみんなが一つになっている！”と、感激のあまり泣き出す中学生がいたほど。全員が心から感動した瞬間です。



9月から毎週金曜日の勤務時間後、スタッフに集まってもらって練習を重ねました。みんな歌うのが大好きで、私自身もこの日が楽しみになりました。

世界中のアーティストが集まって作った曲です。歌詞の内容も現地交流にふさわしい。子どもたちは総合学習で英会話を学んでおり、現地スタッフも英語の歌詞なら歌いやすいと思ったのです。

9月からスタッフ一人ひとりに声をかけ、週末の放課後ごとに練習を重ねました。その過程で彼らとも仲良くなれ、それぞれ出身部族が違うことなども知ることができました。

さらに私が担任する6年生はワールドカップを題材に、開催まで取り組みや施設設備、子どもたちの遊び、音楽の各観点で日本と南アを比較する発表をすることになっていましたので、当日の劇中にも彼らに登場してもらうよう計画しました。子どもたちが音楽で学習した歌やリコーダー演奏を日本の音楽として披露する際、南ア側の代表としてアフリカの歌を何曲か歌ってもらえるようお願いしたのです。



そうして迎えた十月三十一日、いよいよ学習発表会本番！  
 まずは南アフリカの音楽を紹介する部分では現地スタッフ全員に登場してもらって、会場は大盛り上がり。そして最後の合唱へ…。

この日のために昼休み返上で毎日学校の車庫で自主練習してくれたスタッフのみなさん。“練習するから見に来てくれ”と毎日のように声をかけてくれました。本当に気のいい人たちなのです。



最後には遂にみんなで We are the world を歌うことができました。楽譜を取り寄せてアレンジして、スタッフと練習して打ち合わせて…と大忙しの2カ月。でも“子どもたちとスタッフの距離が近づいた”と親もスタッフもすごく喜んでくれたので、やりがいがありました。英語もずいぶん上達。こういう実践ができるのは在外教育施設のいいところ。やっぱり人と人の交流が一番です。

《現地交流2年目》

## 日本人学校史上初・児童が SOWETO を訪問 ～ 『南アフリカで友だちを作ろう!!』 ～

芸術鑑賞会の取り組みを通じて SOWETO の人々と交流するようになった私は、赴任2年目にはその交流を子どもたちのレベルでも進めたいと考えました。違いを自然に受け入れる彼らの寛容性や毎日を一生懸命生きようとする彼らの姿には、今の日本の子どもが学ぶべきものがあると感じたからです。

黒人は危険な人々、SOWETO は危険な地域…という先入観を乗り越えて、本当の南アフリカの人たちと友だちになっちゃおう、という日本人学校始めて以来の活動を報告します。

“見ようとしなければ、SOWETO の人たちの生活は見えないものなんです”。赴任初年度の教師研修でオランダ孤児院を始め SOWETO 地区を見学した際に、案内してくださった大使館の内藤書記官がおっしゃった言葉です。この国に住んでいても、私たち大人は白人御用達のショッピングモールやおしゃれなカフェだけで十分に生活できるし、子どもたちだって現地校との交流とか英会話の学習を通じて国際理解学習もできます。南アの現実を知ろうとしなくても生きていけるかもしれません。

だけど、未来を担う子どもたちにはどうしても見てほしかった。

安全面や相手の反応の不透明さなど、私たち教師も一抹の不安を持ちながら進めてきた今回の校外学習でしたが、結果を見れば“みんなを連れて行って本当によかった！”と思えるものになりました。オランダ孤児院の子どもたちは遠い国から来た日本人の子どもたちをと受け入れてくれましたが、日本人学校の子どもたちがものすごく積極的に孤児院の子どもたちに働きかけていたからです。現地校である IRG 校との交流などでは、先生が仲介しないとパートナーともモジモジと目をそらすような印象が強かったのに、今回は自分の方から笑顔を向けて、孤児院の子どもたちをグイグイ引っ張っていました。ちょっと驚きです。

事前指導の中で私自身の体験を話し“相手の反応を恐れてこちらから声をかけずにいたら、孤児院の子たちは心を開いてくれないかも。まずはこっちから『友だちになりたいんだよ!』と一歩踏み出して働きかける勇気を持ってほしい。”と伝えてはいました。でも正直ここまで頑張ってくれるなんて、日本の子どもを見直しました。



子どもの可能性って、本当にすごいものです。人種とか言葉とか文化とか成育歴とか、ものすごくたくさん違いをあっという間に乗り越えて（無視して?）ずっと友達だったかのように仲良くなってしまいうのでから。自分を受け入れてもらえた喜びは、そのために努力をすればするほど大きく返ってきます。自分の存在を認めてくれる人がどこかにいると思うと生きる希望が持てます。交流ゲームの内容が楽しかった、とかじゃなくて、もっと根源的な人間の心の喜びを、日本よりずっとわかりやすくこの国の人々が教えてくれる気がします。



…とはいえ、最初はこんな状態。“やっぱり孤児って暗いのかなあ…”と不安げ。準備の時間を十分とってあげられず、進行もたどたどしい。

でもひとりひとりパートナーの名前を教えると、日本人学校の子の方から笑顔で手をふってあげる姿が！時間が押して自己紹介のゲームもカットしていきなり習字とボール流しのアクティビティーに突入です



最初は胡散臭そうな目で遠巻きにしていた年齢の高い子たち。でもやっぱりこちらから声をかけて名前を聞き、当て字の漢字で筆書きしてあげると次々に集まってきました。

“僕の名前も教えて！”と私たちの前に順番待ちの行列ができるほどの人気。実はこの年長の子たちは、のちに私にとって大きな支えとなって今後の交流を引っ張ってくれることになります。



IRG校との交流でやろうと計画したけど、時間がなくなってお蔵入りしていた『DOROKEI』。

パートナーに選ばれた十一人だけでなく、孤児院の子みんなを巻き込んで遊ぼうと今回再挑戦。結果はご覧のとおり大成功。下は幼稚園、上は高校生の年齢まで、グラウンド一杯に歓声が広がりました。それにしても黒人は足が速い！



孤児を代表してあいさつしてくれた Sisigirl さんは幼いころの虐待で右手首がなく顔にはやけど。でもすごく前向きな子でした。

## 交流はさらに発展しました。合計3回の交流会

先週、以前校外学習で訪ねたオランダ孤児院の子どもたちとの交流をさらに2回実施しました。1回は孤児院を再訪問。もう1回はとうとう日本人学校に孤児院の子どもたちを招いて、いっそう交流を深めることができました。

再訪問では、パートナーと2人で活動する場面を設けました。日本人学校のみんなは思い思いの方法でパートナーを楽しませようとしていました。一緒に折り紙を折ったり、カードゲームをしたり、その中でいろいろなことを聞き出していきます。「学校と孤児院の交流」というのではなく、個人と個人の交流に進むことが今年の大事な目標だったからです。

日本人学校に招待した際には、もう本当の友だちとして最初から笑顔で楽しむことができました。交流後に描いてもらった作文からは、子どもたちの視点がパートナー個人に向いていることがわかります。「南ア人」「日本人学校児童」「黒人」と一把ひとからげの存在ではなく、あくまで「タビソと秀平」「テフォンと拓海」という存在を認め合うことが、お互いの理解を深めていきます。

南ア人が全て強盗じゃないし日本人はすべて勤勉じゃない。結局はひとりひとりの心の交流こそが、“わかりあう”という結果に至る大事なステップなのです。



## 2 学期、再びオランダ孤児院を訪問





再訪問ではまたもドロケイでアイスブレイク。前回時間がなくてできなかった施設内の見学もさせてもらい、乳幼児の部屋も見てもらいました。一人の子はすっかり日本人学校の子になつてしまい、離れようとしませんでした。生後2カ月の子どももいました。かわいい分、この子たちにはずっと見守ってくれる親がないのだという事実、切ない思いも感じたでしょう。これもまた実際に触れ合ってみてわかる心の動きかもしれません。

### ついに日本人学校での交流が実現！



様々な困難を乗り越えて、日本人学校への招待が実現しました。



孤児院の先生いわく、“私たちを招待してくれた学校は初めて。”とのこと。パートナーが割り当たらなかった子も含め、バスに乗れるだけ乗って連れてきたという孤児院の先生の気持ち、わかる気がします。

サッカーでアイスブレイクしてから、お互いの似顔絵を描きました。この絵はなんとも言えない味のある作品になりました。相手をじっと見ることも、一人の人間として認識する有効な手立てです。

## 教会の聖歌隊コンサートも2年目を迎えました

SOWETO からクワイアの方々が来て下さいました。昨年初めて日本人学校にお招きして公演していただいたとき、その表情と歌声と明るさに引き込まれるようにして徐々に徐々に日本人学校の子どもの心が開いていき、とうとう一緒になって踊り歌い出しました。日本の子が隠してしまっ



ていたものを、南アフリカの人々が引っ張り出してくれたような、素晴らしい体験でした。でも、だからこそ今年はもはやあれ以上のものは望めないだろうとちょっぴりあきらめていたところもあったのです。せっかく来てもらっても、昨年を知っている人が“なんだ、昨年と一緒にか…”などと感じガッカリするようなら、なによりもクワイアの面々に申し

訳ないと思っていました。

しかし実際は全くそうではありませんでした。彼らのパワーは私の心配など吹き飛ばしました。今年の公演は、昨年以上に感動的でした。公演が始まってすぐ、早くも2曲目(!)には子どもたちが前に飛び出してクワイアの皆さんと歌い踊り始めました。こんな積極性、去年はあったっけ? こういう姿が、もしも『自分から進んで関わろうとする力』を育て

ようと学習発表会に向けて進めてきた孤児院との交流やSOWETOの方との交流など今年私たちが仕掛けた学習体験の成果であるなら、「してやったり!」です。

昨年来、私は家族を連れて、あるいは単独で、ときにギターを抱え、彼らの教会に通って来ました。そして行くたびに必ず楽しい思いをして帰って来ました。今年、もしもまた彼らを学校に呼べるなら、絶対に日本人学校の子どもたちと彼らに同じ歌を歌ってもらおうと考え始めたのは6月ごろ。『We are the world』と『Wavin' Flag』の歌詞カードを作り、彼らの練習場所になっている教会のガレージでジャカジャカとギターを鳴らして練習を重ねました。練習というと、なんだかマジメで厳しいもののように聞こえますが、彼らと一緒に歌う時間は本当にただただ楽しいものでした。いつの間にか教会の近所の子どもたちも集まってきて大合唱になります。行くたびに顔見知りが増え、“待ってたよ!”と抱きしめてくれる人も多くなりました。教会通いにつきあってくれるようになった同僚の先生が“心が洗われる体験”と表現していましたが、まさにそんな感じです。

ただ、私のようなアタマの固い人間でさえこれほど楽しいのだからみんなにとって楽しくないはずはない、と思う反面、彼らの表裏のないストレートなよさは、日本の人々





に受け入れられるものなのか不安もありました。だけど子どもの可能性は素晴らしい！ 表裏を使い分けなければ生きていけない日本人社会のシガラミなどどこ吹く風。昨年よりももっと素直に、もっと心を開いて彼らの歌声や表情を受け止めていました。いつの間にか違いを受け入れ、違いを楽しむ子どもたちに成長していたのです。そしてそれを見て観覧者の方々も次々と歌の輪に入ってくださいました。

同様に、彼らが SOWETO の子どもたちを連れて来たいと思った気持ちもうれしいものでした。昨年みんなの姿を見て、“ぜひ日本の子どもと会わせたい”と伝えてくれたからです。SOWETO の人にそう思わせたみんなはやはり素晴らしい！ SOWETO の人々に、日本への好感を持ってもらうのも『小さな外交官』の役割です。



『ショショローザ』を歌っていただいたときには、観覧の方も加わって長い人間列車ができました。同行して来たセントフィリップス教会周辺の子どもたち14人にも『茶つみ』を教えてあげて交流の輪が広がりました。こういうみんなの姿、私の理想だったんです。



今回の公演は時間も長くとももらい、①クワイアの歌を鑑賞する、②小グループで日本の歌を教えながら触れ合う、③全員で同じ歌を合唱する、という三部構成にしました。昨年の様子から、もっともっと一つになる体験を入れれば彼らの温かさが伝わるはず、と考えたからです。赴任以来何度も歌う機会があった南ア国歌でしたが、今回の合唱が一番感動しました。

歌や音楽は人間の心に直接迫ってきます。それを学んでくれたかな？

## 本当の SOWETO の生活について、自分で聞く体験

自分で体験して考える、という一連の交流活動には喜んで、SOWETOの人々はどんな生活ぶりなのかを調べる学習も進めました。アパルトヘイト時代のこと、今の生活の様子、SOWETOの人々の願い…などを、自分自身で聴き取る試みです。

『日本人学校の子どもは小さな外交官だ』。これは私たち教員が日本国内で在外教育施設について研修する際に、文部科学省の調査官の方などからよく聞く言葉です。“このことについてどう思うか”と聞かれた私は、“外交官は国益のために外国と付き合う人だと考えているので、子どもは外交官ではないと思います。彼らはもっと純粋に相手を知りたいと感じ、友だちになりたいだけなのではないでしょうか。純粋だから受け入れてもらえる。結果的に外交上手と見えるのでしょうか。”と答えた記憶があります。

しかし、本来この言葉の意味せんとする所は別なのかもしれません。私たち大人は外国人の方と交流するのに何らかの意図を持っています。仕事のためだったり研究のためだったり、金儲けのためだったり。理由の正当性の問題は置いておいて、どうしても人づきあいに『裏表』を持ってしまいがちです。だけど子どもは違う。子どもが体験する交流こそが、お互いの距離を縮める本当の意味の国際理解だという話です。

学習発表会に向けて、上学年ユニットでは SOWETO からゲストティーチャーを招いて授業をしました。子どもたちが持っている素直な疑問に、生の声で答えてもらうためです。みんなにはあらかじめ聞きたいことを質問文にまとめ、さらに予想回答を考えてもらっていました。みんなの質問は、例えば『バラックの材料はどこから持ってくるの?』とか、『食べ物は足りているの?』『お金がなくてどうやって子どもを産むの?』など。予想回答と合わせて分析すると、どうも“SOWETO の人たちはみんなシャック小屋に住んでいて、電気や水道に不自由し、お金と食べ物に困っている。”といったイメージを持っているようでした。報道などで伝わってくる情報では、確かにそんな感じですね。おまけに危険で不衛生な場所、といったところでしょうか。

でも本当にそうなのでしょうか? 孤児院を訪ねる前には“孤児院の子たちはきっと暗くて友だちになってくれないかも。怖そうだし…”というイメージだったのに、実際に触れ合ってみたらそんなことはありませんでした。最初こそとっつきにくい感じはあったけど、みんなが心を開いて近づいたらちゃんと受け入れてくれましたよね。じゃあ、SOWETO はどうなのでしょう。やっぱり、信号で停車したら襲われるから急いで走り抜けなくてはいけないのでしょうか。SOWETO から来たゲストティーチャーの方々の家は、貧しい掘立小屋なのでしょうか。みんな病気で、栄養失調なのでしょうか。今回の授業は聞きかじりの情報で判断せず、自分の五感を働かせて情報を得る勉強でもありました。



ゲストティーチャーを呼ぶに当たって、私たち教師は実際の SOWETO を訪ねて住宅の内部や周辺の様子を取材。この日の授業では、みんなが聞く質問を確認したあと、取材時の写真を見てもらいました。するとみんなは“あれ、思っていたよりずっと立派な家だぞ。”“テレビやオーディオまでそろってる。”と、意外そうな顔を見せます。自分の見識に疑いを感じ始めたところでインタビ



SOWETO から来て下さったゲストティーチャーはピーターさん、エスターさん、ベロニカさん、ペルサさん。みなさん古くからの住人で、アパートヘイト時代のことやソウェト蜂起(ヘクター・ピーターソン事件)のこともよくご存知でした。シャック・ツアーはあるものの、ごく平均的な SOWETO の方の生活を知る機会は外国人にとって意外に少ない。



まずは挨拶から。緊張でこわばっていたみんなの表情が、握手をしたりハグされたりするたびにどんどん明るく輝いてきます。これが文字通り『触れ合う』ということ。相手も温かい血の通った人間だと認識できます。

この国で黒人さんと仲よくなるコツは①彼らの言葉で話しかける、②握手で肌の触れ合いをする。南アフリカに来たらぜひお試しを。



その後みんなは縦割り班ごとに4人に質問して回りました。各グループには中学生が入り5・6年生の会話をアシストしたこともあるでしょうが、英語に自信がなかったはずの転入生がわれ先にと手を挙げて質問する姿に、『自分から進んで』という態度を育てたかった私たち教師はニンマリでした。

研究授業ということもあり1時間しかとれなかったために、聞く方も答える方も“もっと時間がほしい!!!”。目と目を合わせて話せば、言葉に頼らなくてもたくさんの情報が得られます。その人の思いとか情熱とか、そういうものってまさに肌で感じてわかるものなのです。

《現地交流3年目》

## 今年も SOWETO の孤児たちと “心の交流” ①

昨年、今まで日本人学校が交流したことの無い元黒人居住区・SOWETO 地区にあるオランダ孤児院の子どもたちと交流を始めたことはお伝えしました。

私自身、『1年目に日本人学校の現地スタッフの方々→SOWETOの教会聖歌隊の方々→2年目には聖歌隊に加

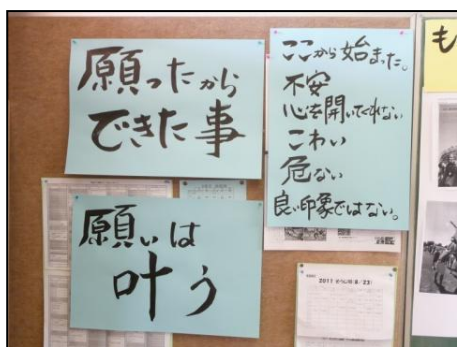


えてオランダ孤児院の子どもたち』と、現地の方々との親交の輪を広げてきました。

特に3年目の今年は、新赴任の先生方が私の取り組みに大変共感を持ってくれ、日常的にSOWETOを訪ねて教会で一緒に歌を練習したり、孤児院で子どもたちと遊んだりするようになりました。個人の取り組み→教科での取り組み→高学年での取り組み→学校全体での取り組み、という具合に現地理解の一つの道筋が固まってきたと感じています。



私は今年度で帰国しなければなりません、私がいなくなった後も南アフリカの大多数を占める黒人の人々と日本の子どもたちのつながりが残ることになり、ホッとしています。



今年度学習発表会に向けて立てた学校のテーマは『とびこもう！南アフリカ』というものでした。日本人学校の子どもたちにも、私たち教師が実際にSOWETOの人々と交流してみて感じた“自分から相手に一歩踏み出せば、必ず想いが通じてわかってもらえる。”という手ごたえを、心の深いところで確信の持てる思いとしてほしいと思ったのです。

中学生が不在の今年度、中心となる6年生は昨年度孤児院との3度の交流を経てすでに“怖いと思っていたSOWETOの孤児の子たちとも、勇気を持ってはたらきかけたら友だちになれた”という成功体験を持っています。彼らに聞くと、“今年は悩みとか将来の夢を話し合えるような本当の友だちになりたい！”といます。そこで、今年度も孤児院との交流を主題材に、『願いを叶えるプロジェクト』としてスタートしました。

7月の校外学習の一環として孤児院を訪問した際、高学年では孤児たちに「大切なもの」「将来の夢」「好きな言葉」「ほしいもの」「きれいなこと」などについて聞いてみました。そこには恵まれた日本の

子どもとは少し違った答えがありました。心の中をちょっとだけのぞけた子どもたちは、オランダの子たちの気持ちを思いやってみました。自分たちの環境と比べてみるようになりました。

そして2回目の交流を計画した時、子どもたちは“オランダの子たちと一緒に苦労しながら何か一つのを創り上げる活動がしたい”と考え始めました。一緒に何かを創り上げる中で感じる一体感やできた時に味わう達成感、同じ目標に向かって協力する時の信頼感などはお互いをより親密にする大きな力となります。子どもたちは先の運動会で自分たちが取り組み、日本人学校の友だちの中においてそのことを強く感じる機会となっていた組体操を、オランダ孤児院の友だちと一緒に挑戦することを思いつきました。

日本人学校の運動会は9月にあります。高学年はそこで例年表現運動として組体操に取り組みます。今年度は5年生に運動嫌いが多く、いろいろな葛藤を経て心の成長とともに当日の大成功につなげた経験をしていました。彼らはそのとき感じた“一人一人が勇気を持って頑張れば、一つのを創り上げることができる”という実感を、孤児院の子たちとの交流に生かそうと考えたのです。

自分の肩に友だちの命を乗せること、誰かの上に自分の命を預けることは、よほどの信頼感がなければできないことです。日本人学校の6年生たちは、孤児院の子たちに対して、もうそれだけの信頼感を感じていたのです。

アパルトヘイトを巡って黒人と白人が憎みあおうとしたとき、ネルソン・マンデラは言いました。『知らないから恐れるのだ。知ろうとしないから分かり合えないのだ』。日本人学校の子どもたちは、勇気を持ってSOWETOを訪ね、孤児たちに話しかけました。わかろう、わかってもらおうとしました。その気持ちを孤児たちはキラキラした笑顔で受け止めてくれました。そのときのうれしさが日本人学校の子どもたちの心に何かを残しています。



高学年は将来の夢や大切なものについて話し合いました。お互い英語は上手くないけれど、なぜか会話が成立します。



今年はずいに日本人学校全学年の児童が孤児院を訪問。



やっぱり音楽は世界共通でした。昨年は『We are the world』『Wavin' frag』を歌いましたが、今年私たちが用意したのは『Heal the world』。マイケル・ジャクソンの名曲ですが、交流会の最後に全員で合唱した際には、その歌詞の意味も相まって感動的な響きの歌になりました。孤児院のスタッフの方々は涙を流していました。この曲は後の学習発表会本番でも歌いました。今年来た先生の一人が元プロのバンドマン。今までいつも一人で心細かった伴奏がずっと楽になりました。この年赴任した4人の先生とは仕事以外でも一緒に孤児院を訪問しました。



昨年は顔がこわばってたのに、今年是最初から笑顔。知ってるってスゴイ。

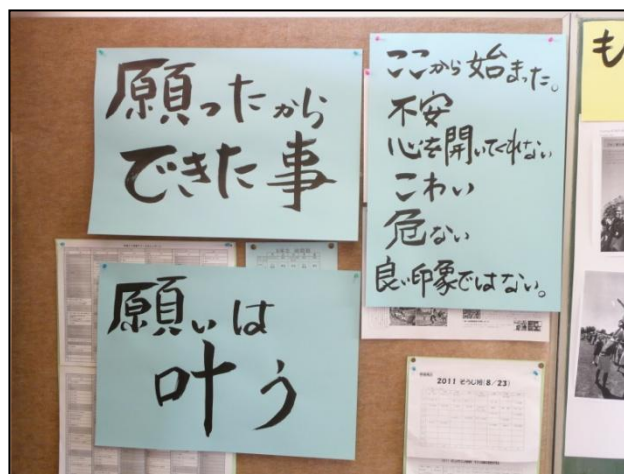


## 前年に続き、オランダ孤児院を日本人学校に招待

校外学習で集めたインタビューの結果から、彼らが大切なこととして学校でしっかり勉強することや愛する家族を作ること、好きな言葉に“お母さん”をあげていることなどを見つけた子どもたちは、苦しい境遇の中自分たちにとってあって当たり前のを求めて頑張る友だちの心を知りました。そして共感しもっと寄り添いたいと考えたのです。

2学期に孤児院の子どもたちを日本人学校に招待する際には、“一緒に何かを創り上げたい”と考えました。それは彼らにとって協力し合うことであり心をつにすることもあったのです。具体的には運動会で子どもたちが一生懸命頑張って創り上げた組体操を、孤児院の友だちと再現しようというものでした。6年生の担任が体育担当で、組体操の中心指導者だったことも大きな力となった。

さらに『Necessity』『Love』『Future』というテーマで一つの紙にそれぞれのイメージを絵にして表現することにしました。言葉の壁も絵ならば乗り越えられると考えたのです。



当日は3つのグループに分かれて日本人学校と孤児院の子どもたちが混じり合い、組体操に挑戦しました。そこでも2年来私と交流のあった年長の孤児たちがリーダーシップを発揮してくれ、体重別にグループ分けするなど下級生の面倒を見てくれます。彼らは落ちたり崩れたりすることを全く恐れずどんどんチャレンジしていきます。その姿もまた、日本人学校の子どもたちに感銘を与えました。そして実際に組体操が成功した時の彼らの表情には、“一緒になれた”という満足感がはっきり表れていました。





昼食にはPTAにも協力を依頼してカレーライスを作ってふるまっていたことができました。昨年の交流を知っていた保護者が声をあげてくださったのです。

一部からは“孤児の前で母親が出るのはどうか”という懸念も聞かれましたが、その考え方を極論すると“別れるのが辛いから仲良くなれない方がいい”“死ぬのがいやだから生まれたくない”というのと同質。孤児院の子どもたちは、例え今目の前にある楽しい思いが未来永劫続くものではないと知っていても、精一杯楽しもうとしています。未来に不安があってもそれから逃げずに一生懸命毎日を生きています。もしも子どもたちが失敗を先に考えていたなら、孤児院の子たちとは友だちになれなかった。受け入れてもらえないかもしれないと知りながら、自分たちができることを尽くしたからこそ、彼らの心を開くことができたのです。まさにそこに一連の交流学習の成果があるのです。そう話すとお母さんたちは笑顔になりました。



PTAの方々が自分たちのために時間を割いて料理してくれた気持ちを、孤児院の子たちはしっかりと理解していました。そして素直にそれを喜び感謝の気持ちを持ってお礼を述べていました。特に年長の子たちは日本語でお礼を伝えようと言葉を聞いてきました。表裏を使い分けることを考える以前に、自分の気持ちに素直になれる。これも私たちが彼らから学ぶべき点の一つでした。

日本人学校の子どもたちがかつてそうだったように、保護者もまた彼らを知ることで恐れを超えて心の触れ合いを楽しむことができるようになりました。孤児たちのあの輝く笑顔に間近にすれば、誰だって優しい気持ちになってしまいます。『わかり合える。知ろうとすれば』。



学習発表会当日は今までの交流活動をそのまま劇にして紹介しました。事情を知らない人から見ると全員が作文を発表する時間が長く冗長な劇と見たかもしれません。しかし一人一人の子どもが心に刻んだものを伝えることは、この交流活動の根幹にかかわる活動です。『日本人学校と孤児院の交流』ではなく、あくまで一人の人間同士の交流『中島あきらとトゥーソの交流』だったからでした。それを貫いたからこそ、相手の気持ちを親身になって考えることができたのだと思うのです。だからどうしても一人一人の思いを発表させたかったのです。

白人支配体制を覆して大統領になったネルソン・マンデラはこう言っています。

“私たちはお互いに知らないから恐れていた。得体の知れない存在として、触れ合うこともせずに怖がっていたのだ。お互いに関心を持ち、お互いをよく見れば決して恐れるものではないとわかる。相手を知ろうと一歩踏み出す勇気を、今私たち黒人が示そうではないか”。

日本人学校の児童が始めた交流活動は、この言葉を実践したものとなりました。一歩踏み出す勇気があれば、言葉が通じなくても肌の色が違っても、こんなに温かい気持ちで寄り添い合える。この体験が子どもたちの未来に必ず役に立つものであると信じています。



最後に、活動のまとめとして子どもたちが発表した作文を紹介します。この子どもたちは前年SOWETOの人々と初めての交流を始めて2年目を迎えた小学部6年生たちです。恐れを乗り越え、互いがわかり合うプロセスを身をもって味わった子たちです。私ごとですが、この中の一人は私の息子です。親子でこんなに感動できる日々を体験させてくれた南アフリカの人々に本当に感謝しています。



## 『願いは叶う』①



『一緒に何かを成し遂げたい。』そして、『もっともっと仲良くなりたい。』  
僕たちは、オランダの友だちと組体操にチャレンジすることを決めました。僕は、一緒に架け橋を創りたいと思いました。オランダ孤児院と日本人学校を繋げたいと思ったからです。しかし、オランダの友だちは組体操をやったことがありません。「本当に出来るのか？」僕は、すごく緊張していました。

始めに3人塔を創りました。土台はオランダの友だち。2人が肩を組んで土台を創り、僕が乗るのを待っています。2人の黒人が僕を支えようとしています。僕はおそろおそろ背中に足を乗せました。恐くて何回やっても乗れません。土台の2人がゆらゆらしながら、ゆっくりと立ち上がりました。「一緒に出来た。」嬉しさがこみ上げてきました。次に、オランダの小さな子を上げることにしました。黒人の男の子はすごく嬉しそうでした。「やって良かった。」と思いました。失敗もしたけど、架け橋も成功しました。オランダ孤児院と日本人学校が繋がりました。

オランダの友だちはとても喜んでいました。感想を聞いてみると僕たちと同じように達成感を感じていることがわかりました。『一緒に何かを成し遂げたい。』という僕の願いが叶いました。

僕は、「黒人が怖い。」と思っていましたが、そうではありませんでした。お互いのことを知らないだけだったのです。世界に目を向けると、お互いのことを知ろうとせずに争いや戦いを起こしている国があります。これから、南アフリカの人々に、そして、世界の人々に先入観にとらわれず、勇気を出して1歩踏み出して欲しいと思います。それが僕の『新たな願い』です。

## 『願いは叶う』②

「もっともっと仲良くなるにはどうしたらいいのだろう？」

私は、「オランダの友だちのことを、もっと知ろう。」と思って交流活動を続けてきました。初めての交流では、オランダの子たちが怖いと思っていました。友だちになれないかもしれないと不安でした。Soweto は、危険な場所だと聞かされていたからです。

しかし、私は思いきって自分から相手に話しかけました。一緒に遊んだり、お話をしたりするうちに本当はとても優しく、明るい子たちだと分かりました。始めは怖い顔をしていたオランダの子たちが、私に声をかけてくれたとき、そして、笑いかけたときは本当に嬉しかったです。一緒に組体操を成功させたときは、一緒に喜び合いました。オランダの友だちの笑顔を見て、「すごく仲良くなれた。」と実感しました。相手のことを知ろうとしたからこそ出来たことだと思います。

初めは、黒人に対して良い印象を持ってませんでした。相手のことを知らずに恐れていたのです。南アフリカでは、黒人と白人が別々の場所で生活しているので、私のように相手を知らずに恐れている人たちがたくさんいると思います。日本人も同じかもしれません。南アフリカの人々の優しさや明るさを知らずに恐れている人たちがいるのではないのでしょうか。

私は、相手を知らうとしたから仲良くなりました。わかり合うことが出来ました。もっと相手のことを知らうとする人たちが増えると良いと思います。そして、いつかの国が、みんなで手を取り合って生きて行ける「虹の国」になって欲しいです。



### 『願いは叶う』③

僕たちはオランダ友だちと一緒に、「大切なもの」「楽しいとき」「欲しいもの」「好きな言葉」「嫌いなもの」「幸せでないとき」について考えてみました。また、『FUTURE』『LOVE』『NECESSITY』をテーマにして、オランダの友だちと一緒に絵を描きました。サッカー選手、パイロット、車、家、学校、平和、健康など、オランダの子と日本の子の気持ちや願いが描き込まれていきました。初めは、僕たちに心を開いてくれなかったオランダの友だちが、本当の気持ちを打ち明けてくれているようで嬉しくなりました。

オランダの友だちの方が僕よりも欲しいものがたくさんありました。好きな言葉に「Mother」と書いていました。大切なものに「学校を卒業すること」と書いていました。僕たちにとって当たり前のことが、オランダの友だちにとっては当たり前のことでありませんでした。

オランダの友だちも日本の友だちも同じように「家族」と「友だち」大切にしていることが分かりました。住む場所や生活環境は違っても、幸せを願う気持ちは一緒でした。

そして、オランダの友だちは、自分の将来についてよく考えています。幸せになるために一生懸命勉強しています。

僕は、今年の交流活動で、「みんなが同じように幸せを願っていること」「互いにわかりあえれば何かを成し遂げられること」を知りました。

オランダの友だちと描いた『みんなの未来への願い』を一緒に叶えたいです。



孤児院の子どもたちも、ともに未来を考えたいという日本人学校の子どもたちの願いをしっかりと受け止め、真剣に考え感想を書いてくれました。

Please Write Today's Impression

Name **SISIGIRL**

1 About GYMNASTICS (Group EXERCISES)

How do you feel about your friendship with the Japanese students?

I feel very much loved for the fact that we have friendship and i feel so blessed to have friends like this.

2 About DRAWING PICTURE

How is the way to make a more brighter world?

Being happy all the time love, peace, care, responsibilities and happiness.

How did you feel the drawing with the Japanese friends?

I felt educated because i learned so much from them which was fun and interesting

Please Write Today's Impression

Name **Boy Nkosi**

1 About GYMNASTICS (Group EXERCISES)

How do you feel about your friendship with the Japanese students?

I feel very happy coz they help me when i need someone to play music They are always there for me i will always be there for them two way they need me coz anytime it's tea time with me. to all my friends love u all.

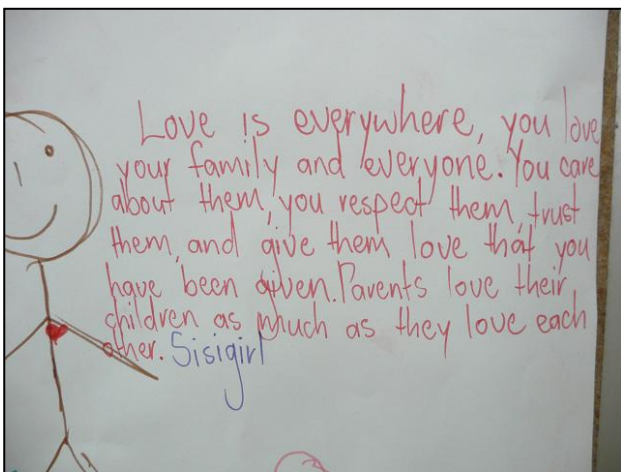
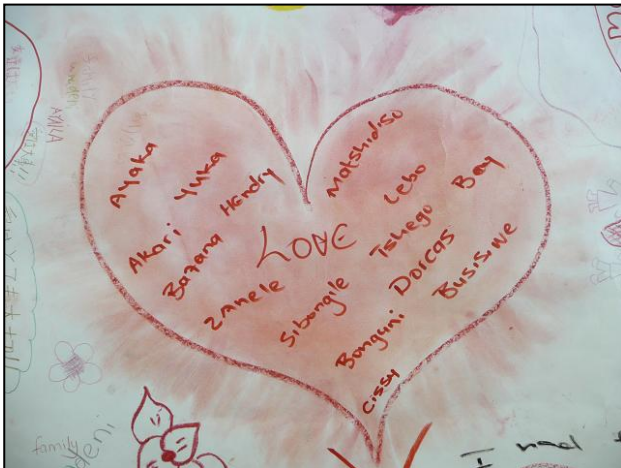
2 About DRAWING PICTURE

How is the way to make a more brighter world?

When we all show love fore each other and dont forget are friends in that way we can make a brighter world with Japanese in South Africa.

How did you feel the drawing with the Japanese friends?

I felt so good coz they help me a lot and drawing is alsow my favort Thank you!



#### 4、最後に

日本人学校の児童生徒の多くは海外に広く展開する日本の大企業に勤務する親を持つ。アパルトヘイト時代、多くの先進国が“人類に対する罪”とまで言われたアパルトヘイトに経済制裁で対抗しようとした中で日本は貿易を続け、名誉白人の称号(?)に守られて国際的な批判の中で利益を上げていたのは歴史的事実である。その意味では間接的にせよこの国で貧困にあえぐ黒人たちに対する責任もあるのではないかと思う。

将来海外に出て働く可能性の高い日本人学校の児童生徒たちが相手の体温を感じながら交流した体験を持ってくれたことが、必ず日本の将来をよい方向に導く光となるのではないかと考えている。そんな子どもを育てていくのは在外教育施設の重要な責務であると思うのだ。

紹介してきた現地理解の取り組みは、私自身が南アフリカで生活を始めた中で接した黒人(スーパーのレジ係とかレストランのウェイター)のイメージが、あまりに日本国内で流布されていたものと違うと感じたところからスタートした。“本当にこの人たちが危険なのか? 貧しくて汚くて、避けるべき存在なのか?”という疑問を追い求める気持ちがSOWETOに目を向け彼らの生活圏に足を踏み入れ、さらに彼らの日常生活に触れる動機となった。

そこから見えてきたものに価値を感じ、少しずつ日本人学校に紹介していく中で、同僚たちが共感してくれるようになった。何度も一緒にSOWETOを訪ねる中で彼らと交流する意義や教育的な価値を感じた同僚たちが、私が帰国したあとも様々な形で交流をつないでくれている。

日本人は白人生活圏で暮らしているので白人との交流はいくらでもできる。意識しなければ黒人社会は見えないが、少なくとも全人口の8割を占め、大統領はじめほとんどの閣僚も占める黒人の生活から目をそらせたままで『南アフリカの現地理解教育』は成り立たないのではないか。

そして紹介したとおり、違いを受け入れる大らかさや目の前のことに一生懸命になれる実直さ、思ったことを正直に表現する裏表のなさなど、ともすると現代日本で失われかけている“人間として大切なもの”を見つけることができる活動でもあったと考えている。違うことは見つけやすい。国や民族や文化が違って、変わらないものは何か。それこそが人間として大切にすべきもの、ということだろう。

その意味でこの国は、世界平和を実現するためのヒントを与えてくれる“未来を照らす希望の光”なのだ。

豊かさとはなにか。帰国して以来、自問自答する日々が続いている。

